



生物多様性 わかもの白書

vol.1

2015年 6月



目次

• はじめに	1
• 本書の特徴と構造	2
• 第1章 生物多様性に関する活動の実施状況	
• アンケートの目的	3
• アンケートの概要	4
• コラム：生物多様性とは	4
• コラム：愛知ターゲットとは	7
• アンケートの結果	8
• コラム：ABSとは 学生環境団体いそべやで行われた「ABSゲーム」	11
• コラム：生物多様性に関わる活動の紹介 （農楽塾、木津川グループ河川レンジャー）	12
• 考察とまとめ	17
• 今後に向けて	18
• 第2章 特徴的な活動事例	
• インタビューの概要	19
• わかもの×地域活性（あざおね社中）	20
• わかもの×行政×企業（命をつなぐPROJECT学生実行委員会）	22
• わかもの×研究（東京海洋大学うみがめ研究会）	24
• インタビューより	26
• 生物多様性を守るために、あなたにできること	27
• 編集後記	28
• 謝辞	29

失われゆく生物多様性・大量絶滅時代

生命は、地球上に誕生してから40億年もの長い時を経て様々な環境に適応し、実に多種多様な生き物へと進化してきました。その生物多様性から人々は様々な恵み(=生態系サービス)を享受して、豊かな暮らしを築き上げてきました。

しかし、現在、開発や乱獲、外来種の侵入や気候変動など、様々な人為的活動の影響から、生き物たちは急速なスピードで姿を消しつつあります。これまでも5回、自然現象が原因となって大量絶滅が起こっていましたが、「第6の大量絶滅時代」とも呼ばれる現在の大量絶滅は、過去に例を見ないスピードで起きています。

2010+5年

生物多様性は、人々の暮らしと密接に絡み合っています。危機に瀕している生物多様性の減少を止めるためにも、多くの国や人々が向き合わねばなりません。この問題に対応するために、2010年に愛知県で生物多様性条約第10回締約国会議(CBD-COP10、以下COP10)が開催されました。ここで、「自然との共生」というビジョンと、そのビジョンを実現するため、2020年までに達成が必要な20の個別目標「愛知ターゲット」が全加盟国(193の国と地域)の総意で議決されました。これらは、政府の努力だけではなく、企業やNGO、それに私たち「わかもの」を含む市民など、一人ひとりの行動があってこそ達成される目標であることが大切なポイントです(愛知ターゲットの詳細は7ページ)。

今年(2015年)は、ちょうどその中間年となります。2020年に、愛知ターゲットが達成され、未来に生きる次の世代に豊かな生物多様性を残すためにも、今そしてこれからの私たちの行動が試されています。

未来の担い手「わかもの」

本書で取り上げる「わかもの」とは、広く20代前後の、今まさに自分の生き方を選び、掴み取ろうとしている世代を指しています。子供から成人となり、自分自身の将来を自ら選択し、それに向けて努力する、まさに社会の中で“受け手”から“担い手”へと変化する世代です。これからの未来を生きる「わかもの」だからこそ、自分たちの生きる時代、そしてさらに次の世代に向けて、意志と責任を持ち、行動を示すことが重要です。



活動と活動をつなぐ「生物多様性わかもの白書」

この「生物多様性わかもの白書」は、国内の「わかもの」による生物多様性の保全と持続可能な利用に向けた活動を把握・発信し、“生物多様性”をキーワードに、一つひとつの活動をつなげ、発展させることを目的としています。

そして、読者の皆さまにとって、本書が、生物多様性を守るための行動を始めるきっかけや、活動のさらなる発展につながることを心より願っています。

「学生団体の活動」の把握

一言に「わかもの」と言っても、大きく学生や社会人に二分され、さらにその中には、それぞれに多様な生き方、活動、仕事をしている人がいます。その中でも、今回の「生物多様性わかもの白書 vol. 1」では、アンケートおよびインタビューによって“環境問題に関する活動を実施している学生団体”の活動を把握することとしました。理由は2つあります。

1つ目は、活動の実態把握がしやすいためです。学生団体という組織ならば、連絡先や活動内容がまとまって公開されていることが多く、学生の個人を対象とするよりもアプローチが容易です。

2つ目の理由は、波及効果です。組織に所属している社会人にとって、与えられている業務から大きく逸脱した行動をとることは容易なことではありません。しかし、学生にはそうした縛りは少なく、むしろ自分の将来を形成していくために、学校という場にとらわれず貪欲に経験を積み、知識を吸収したいというモチベーションが大きいと感じられます。そこで、学生に行動のオプションを提案することは、すぐさま行動を喚起することになると考えました。また、本書作成に協力をいただいた学生団体に対しても、生物多様性という文脈で様々な活動をつなげた本書をフィードバックすることで、団体間でのコミュニケーションにもつながり、相互のモチベーションの増大も期待できると考えました。

もちろん、学生団体だけを調べて「わかもの」全体が把握できるわけではないですが、まずは、各地で行われている“学生団体”の特徴的な活動を把握し発信し、これからの足がかりにして今後、「社会人編」や「個人編」などさらなる続編を作っていきたいと思います。

前半はアンケート・後半はインタビュー

本書では、第1章に2014年 9月～12月に全国の環境問題に関する活動を実施している学生団体に行った、「生物多様性に関する活動についてのアンケート」のアンケート結果を、第2章に、具体的な活動に迫るために、いくつかの特徴的な活動をしている学生団体に実施したインタビューの結果概要をまとめました。



第1章 生物多様性に関する活動の 実施状況

アンケートの目的

愛知ターゲットが議決されて5年の月日が経とうとしていますが、まだまだ社会のなかで生物多様性をめぐる問題がきちんと把握され、その保全や持続的な利用に向けた活動が十分になされているとは言えません。一方で、全国各地の環境問題に関心を持ち、活動する学生団体では、絶滅に瀕した生き物の保護活動や里山での農作業や竹林の管理活動など、生物多様性に関する様々な活動が行われています。

今回、私たちは、学生団体における生物多様性に関する活動の実態を把握することを目的に、環境問題に関する活動を実施している学生団体に対して「生物多様性に関する活動についてのアンケート」を行いました。また、アンケートを通して活動のモチベーション要因や課題を知り、生物多様性に関する活動を促進させるために、どのような取り組みが必要かを探りました。

アンケートの概要

手法

アンケートは、自然観察会や調査研究、まちづくり、学内での美化活動、農林業など広く環境問題に関する活動を実施している全国の学生団体に協力をお願いしました。団体ごとの条件を揃えて結果を比較しやすいように、各団体のメンバー複数人に回答をお願いするのではなく、代表もしくはプロジェクトリーダー等、活動全体を把握する方一名に団体を代表してご回答いただきました。

回答方法や配布方法は下記のとおりです。

- 回答方法: ウェブフォームを利用し、回答者に次項に示す項目について記入をお願いしました。
- 配布方法:
 - 1) 生物多様性わかものネットワークのメンバーから学生団体へのメールでのお願い
 - 2) FacebookやHPでの告知
- 対象: 1) ウェブサイトなどで調べた環境問題に関する活動を行う学生団体 2) 不特定多数の学生団体

コラム: 生物多様性とは

生物多様性は、3つに分けられます。

生態系の多様性



生き物の暮らす環境が様々であること。山、海、川などそれぞれに異なる生き物同士のつながりがあります。私たちは、それぞれ異なる風景を楽しむことができます。

種の多様性



たくさんの種類の生き物がいること。それぞれの種が関わりあって生きています。

遺伝子の多様性



個体ごとに殻の模様が違います。

同じ種類の生き物であっても、個体ごとに異なる遺伝子を持っていること。病気が流行っても、免疫のある個体がいれば絶滅が避けられます。

生き物同士は、食べる・食べられるの関係だけでなく、昆虫が媒介することによって受粉できる植物や、サンゴに住む場所を提供してもらっている魚など、様々なかたちでの関わりあって生きています。一見関わりのないように見える生き物であっても、いくつもの生き物同士の繋がりを介して、生きていくために不可欠な関わりがあるかもしれません。生物多様性がほんの少し失われるだけで、どこにどれだけ影響が出るかは未知数です。だからこそ、守っていく必要があります。

3つの生物多様性、全てがあるから、私たちは自然の恵みを受け続けることができるのです。

アンケート項目

アンケート項目は下記のとおりです。

1. 回答者情報
2. 団体情報
3. 生物多様性に関するキーワードの認知度
4. 生物多様性に関する活動について
5. 生物多様性に関する活動を実施していない理由



図1. アンケートのウェブフォームの一部

「4. 生物多様性に関する活動について」の項目

生物多様性は様々な環境問題と関与している一方で、その関係性が認識されづらいものです。すでに実施されている環境問題に関する活動のなかにも、関わりが認識されていないだけで生物多様性に関する活動が多く存在するのではないかと考えました。

そこで、今回、以下のような質問を設け、回答者が生物多様性に関する活動を実施しているかどうかということと、それらの活動を生物多様性との関わりについて意識して活動しているかどうかについても実態を把握できるようにしました。

まず、生物多様性に関する活動の実態を把握するために、愛知ターゲットを基に、より具体的でわかりやすい活動の形に読み替え選択肢を作り、それぞれの活動の実施の有無を質問しました。その結果から、選択肢で挙げた生物多様性に関する活動にどれも該当しなかった団体を「該当なし」としました(図2)。

その質問のあとに、上で述べた選択肢のうち少なくとも一つでも「実施している」と回答した団体について、その回答した活動と生物多様性との関わりを意識して活動をしているかどうかを質問しました。その質問で「はい」と回答した団体を、生物多様性に関する活動を意識的に実施している団体として「意識」、「いいえ」と回答した団体を、生物多様性に関する活動を実施しているものの、活動と生物多様性との関わりを意識していない団体として「無意識」としました(図2)。

アンケート項目		回答結果			
		団体A	団体B	団体C	団体D
選択肢にある活動を 団体で行っていますか？	普及啓発※	○	×	×	×
	政策提言※	○	×	×	×
	消費活動※	×	×	○	×
	化学物質※	×	○	×	×
	脆弱な生態系※	×	×	×	×
	...	×	×	×	×

「生物多様性」との関わりを意識して活動していますか？	○	○	×	
	意識	無意識	該当なし	

図2. 「意識」「無意識」「該当なし」の区別について

※ 選択肢の詳細および、愛知ターゲットと生物多様性に関する活動の選択肢の対応表については次のページに詳細を記しました。

愛知ターゲットと生物多様性に関する活動の選択肢の対応表

愛知ターゲットは、後で述べるように、生物多様性の保全と持続可能な利用のためにすべき行動をわかりやすく20にまとめています。一方で、国際的な目標でもあるため、そのままでは学生団体の活動としてイメージがしづらいものもあります。そこで、私たちは、愛知ターゲットを基に、学生団体の実施していそうな具体的でわかりやすい活動の形に読み替えて選択肢を作成しました。



※1 「ABS」については11ページに詳細を記しています。
 ※2 個別目標19に該当する選択肢は今回含めませんでした。

図3. 愛知ターゲット個別目標と対応する環境活動の選択肢

複数の個別目標が対応する質問を破線で結んでいます。

コラム：愛知ターゲットとは

「生物多様性」は、捉えているものが実に広く、言葉だけを聞いてもその意味はわかりづらいかもしれません。また、その保全や持続可能な利用に向けた行動も多岐に及んでいます。そこで、生物多様性を守るために必要となる具体的な行動をまとめたのが「愛知ターゲット」です。愛知ターゲットは、2010年に愛知県名古屋市で開催された国際会議、COP10で決議されました。

決定の背景

生物多様性条約(CBD)とは、1992年の国連総会で「国連気候変動枠組条約」とともに採択された条約です。条約の目的は、生物多様性の保全、生物資源の持続可能な利用、そして遺伝資源から得られる利益の衡平かつ公正な配分という3つです。2015年現在では194の国と地域が批准しています。

2002年にはこの生物多様性条約第6回締約国会議(CBD-COP6、以下COP6)が行われました。COP6では「2010



年までに、生物多様性の損失速度を顕著に減少させる」ために各国が具体的に行動を起こし始めることを記した、初めての計画(2010年目標)が合意されました。しかし、その結果は「生物多様性の損失は現在も続いており、目標は達成できていない」と失敗に終わりました。それを受け、COP10では「行動に移すこと」に重きを置いた、2020年に向けた新しい計画が決議されました。それが「生物多様性戦略計画2011-2020」であり、その中の重要な目標が「愛知ターゲット」です。

内容

愛知ターゲットは、生物多様性条約の加盟国が、生物多様性・自然の恵みを守り・向上させ、持続的に利用し、公正に利益を分かち合うための目標を示しています。愛知ターゲットの達成のためには、地球・国家・地域という様々な規模で、多様な立場の人々(国際機関・政府・自治体・科学者・企業・NPO・先住民・ユース(わかもの))の協力が必要です。

愛知ターゲットは、2020年までに達成すべき20の個別目標からなり、それらの個別目標は大きく5つの戦略目標に分けられています。

- **戦略目標 A** …生物多様性損失の根本的な原因
(生物多様性そのものを知らない等)に対処する。
- **戦略目標 B** …生物多様性損失の直接的な原因
(森林を過剰に伐採する等)に対処する。
- **戦略目標 C** …生態系、種、遺伝子の多様性の状況を改善する。
- **戦略目標 D** …生物多様性や生態系の恵みを大きくする。
- **戦略目標 E** …目標達成のために参加する人を増やし、
参加する人の知識を増やす。

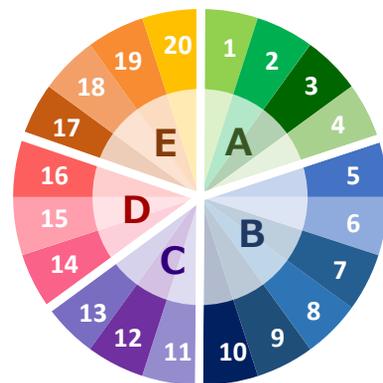


図4. 戦略目標A~Eと個別目標の対応
数字は図3の個別目標と対応しています。

20の個別目標は、それぞれが深く関わりあっています。例えば、海の保護地域を作ること(個別目標11、戦略目標C)は、サンゴ礁の回復(個別目標10、戦略目標B)につながり、それによって漁獲量の回復(個別目標14、戦略目標D)につながるということがあります。一つの行動が、いくつもの目標を達成することに貢献していくのです。

アンケートの結果

回答者情報・団体情報

回答数、回答者情報

39の学生団体からアンケートの回答が得られました。回答者は、大学2年生と大学3年生が大半を占めていました。

団体情報

回答いただいた団体の多くは、関東地方に集中しており、北海道・九州地方での回答はありませんでした。

団体の設立年については、ばらつきが大きく、1990年より前に設立された団体も2団体ありました。

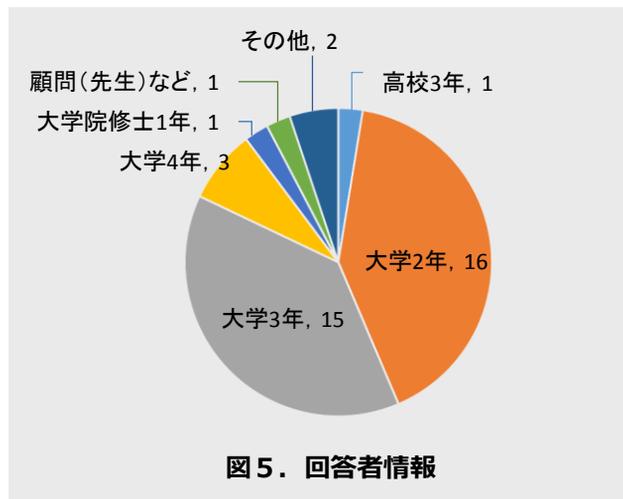


図5. 回答者情報

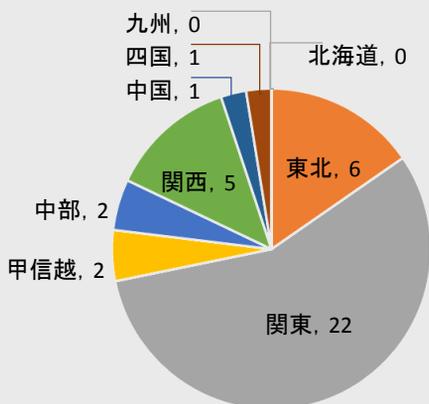


図6. 団体の所在地

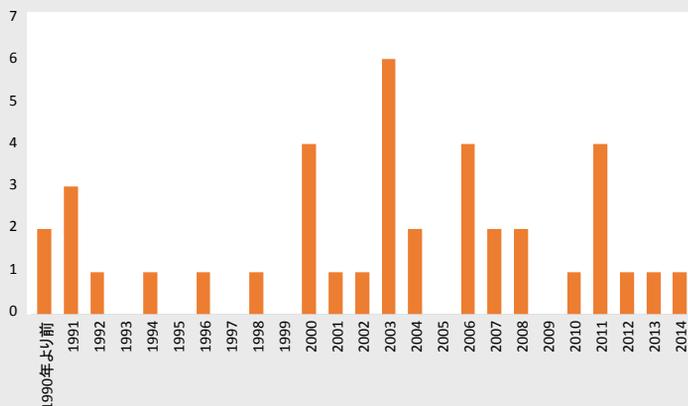


図7. 団体の設立年

団体の形態でみると、単一の大学などを拠点として構成される「部活・サークル」という組織形態が26団体で、全体の約7割と多く存在しました。団体の主なメンバーの構成は、「理系」が中心となっている団体が最も多いですが、「文理総合系」が中心となる団体と「文系・理系・総合系いずれも同数」という団体を足し合わせると同数存在していました。団体規模は、10～50人で構成された団体が過半数を占め、100人以上のメンバーからなる団体も6団体ありました。

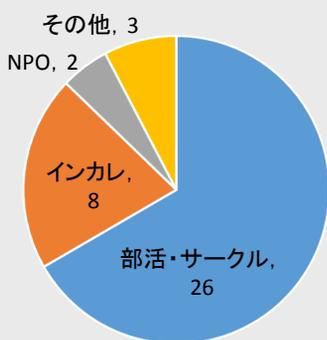


図8. 団体の形態

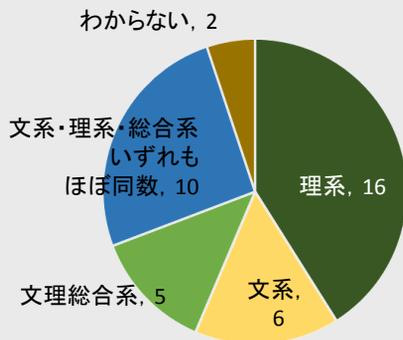


図9. 文理構成

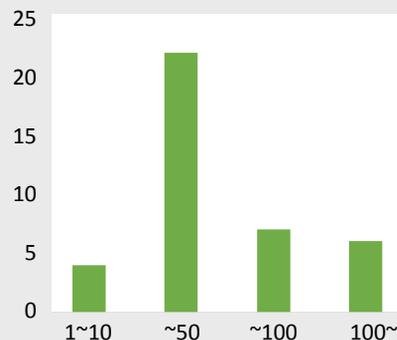


図10. 団体規模

「生物多様性」・「愛知ターゲット」の認知度

ここでは、回答者個人が生物多様性に関するキーワードの認知度について当てはまるものを回答していただきました。環境問題に関する活動を実施する学生団体を対象としたためか、「生物多様性」という言葉を聞いたことがないと回答した人はおらず、「生物多様性」を人に説明できるという回答が過半数を超える結果となりました。一方で、「愛知ターゲット」については、過半数が聞いたこともなく、人に説明できると回答した回答者は約2割にとどまりました。

これらの値は、内閣府で平成26年度(2014年)に行われた「環境問題に関する世論調査」※1 での結果※2 (図11の濃い灰色の四角で囲まれた部分)と比較すると、回答者の年齢層が今回(大学2, 3年生が主)と世論調査(20~29歳および全年齢層)と異なるものの、いずれも高い値でした。

「生物多様性」と「愛知ターゲット」を比較すると「愛知ターゲット」の認知度は低く、「生物多様性」という言葉は知っていても、生物多様性に関する世界的な動きについては浸透していないことが伺えました。

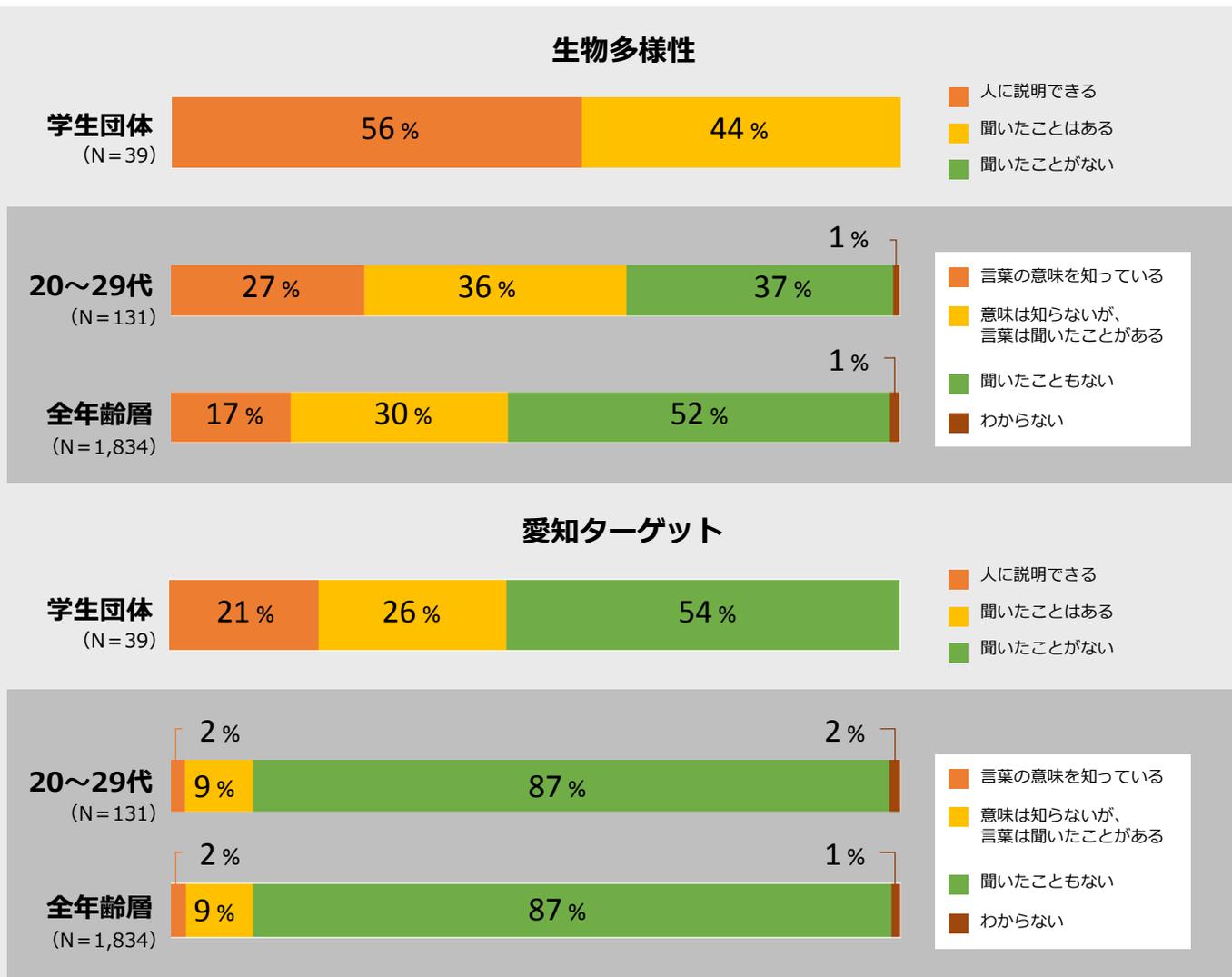


図11. 「生物多様性」および「愛知ターゲット」の認知度

濃い灰色の四角で囲まれたグラフは、内閣府 平成26年度「環境問題に関する世論調査」の結果です。

※1：内閣府 平成26年度「環境問題に関する世論調査」 <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-kankyuu/gairyaku.pdf>

※2：内閣府「環境問題に関する世論調査」では“認知度”ではなく“認識度”、“愛知ターゲット”ではなく“愛知目標”という言葉が使われています。

生物多様性に関する活動の実施数

5ページでも説明したように、ここでは、各団体の活動内容について、愛知ターゲットを基にして作成した、生物多様性に関する活動の選択肢と照らし「該当する活動を実施しているかどうか」と、「その活動を生物多様性との関わりを意識しているかどうか」という2つの質問から、回答結果を「意識」、「無意識」、「該当なし」に分類をしました。

生物多様性に関する活動を意識的に実施している団体（「意識」）が13団体なのに対して、生物多様性に関する活動を実施しているものの、活動と生物多様性との関わりを意識していない団体（「無意識」）、選択肢で挙げた生物多様性に関する活動にどれも該当しなかった団体（「該当なし」）についても、それぞれ13団体ありました。

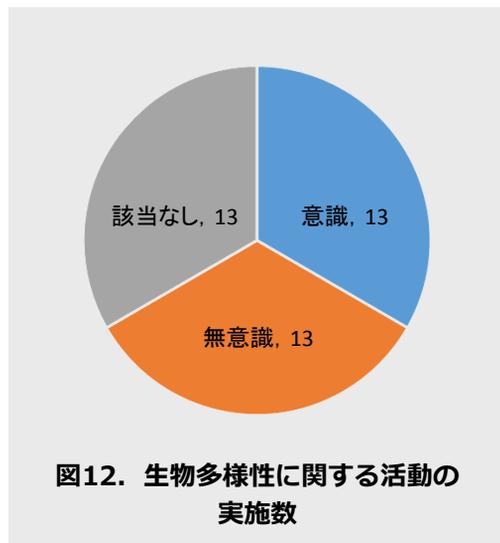


図12. 生物多様性に関する活動の実施数

活動内容別の実施数

選択肢ごとの活動内容に注目し、「意識」と「無意識」のそれぞれの団体での実施数を下の図に示しました。

全体として、自然や生物多様性に関する普及啓発活動（「普及啓発」）の活動が最も多く、次いで、里山などを含む自然環境の保全管理活動（「里山保全管理」）、持続可能な一次産業（農業・林業・養殖業）に関わる活動（「一次産業」）が多く存在しました。

また、活動と生物多様性との関わりについての「意識／無意識」別にみると、生物多様性に配慮した消費活動・グリーン購入（「消費活動」）に関する活動は、「無意識」の団体が占めており、外来種駆除や侵入防止に関する活動（「外来種」）などの専門的な知識も要するものは「意識」的に活動する団体のみが占めていました。

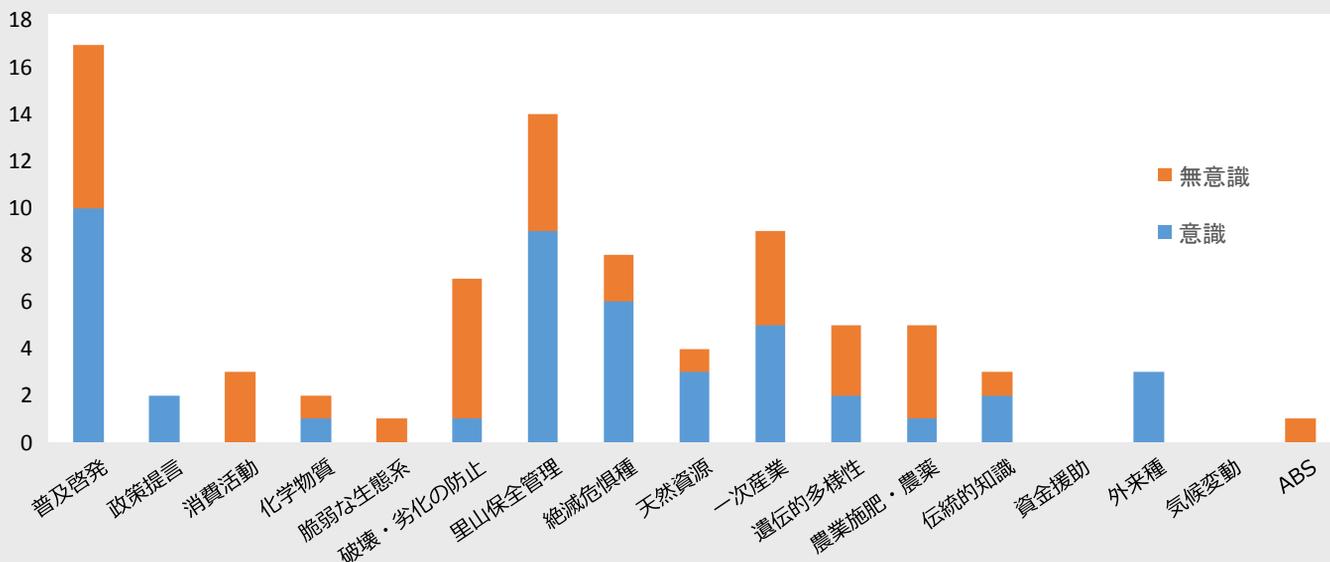


図13. 生物多様性に関する活動の内容別の実施数

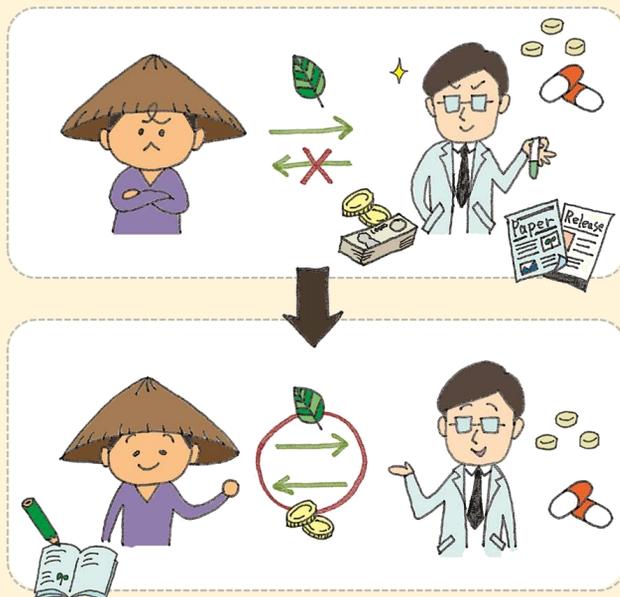
それぞれの活動内容を表した選択肢は短縮表記をします。選択肢の詳細は6ページをご覧ください。

コラム：ABSとは？

ABSとは、Access to genetic resources and Benefit Sharing(遺伝資源の利用から生じた利益の公正で衡平な配分)の略称です。遺伝資源とは、利用価値のある生物由来の素材のことを言います。現在、様々な生き物が、遺伝資源として医薬品や食料品など幅広く利用されています。

こうした遺伝資源の多くは豊かな自然が残る途上国が保有しています。しかし、特に医薬品において、それらを開発し商業利用することで利益を上げてきたのは、技術を持つ先進国がほとんどでした。また多くの場合、その利益が公平に配分されることがなかったため、途上国が不満を持ち、先進国が遺伝資源の提供国にも利益を配分することを求めました。

結果、COP10で名古屋議定書というABSについての決まりが採択されました。現在、遺伝資源を持ち出す際のルールや、得られた利益を公正かつ衡平に分配する仕組みを作り、運営していくための議論が名古屋議定書の場で行われています。



学生環境団体いそべやで行われた「ABSゲーム」

東京農業大学の学生環境団体いそべやは、様々な環境活動とともに、メンバー内で知識をつけるための勉強会を行っています。2014年度に行った勉強会では、ABSを取り上げました。勉強会と言っても座学形式のものではなく、参加者が自ら体感して楽しむことができるような、複数人によるゲーム形式でのディスカッションです。

ゲームは、文化祭でカレーを共同で販売するという想定のもと、「材料」、「レシピ」、「労働力」という異なるものを提供する3つのチームに分かれることから始まります。進行役からカレーの売上額を提示されると、それぞれのチームが、自分の取り分をできるだけ増やそうと画策しながら他の人々と議論し、売上げを三者でどのように分配するのが良いかを決めていきます。ゲーム終了後、実はこのゲームで行われた議論が、「材料」である遺伝資源をもつ途上国と、「レシピ」を開発し、店でお客に販売するという「労働力」によって利益を上げた先進国の間で議論されている、まさにABSにつながる問題であったことを参加者にタネ明かしします。文化祭という身近な設定でゲームを楽しむ中で、現実に存在するABSの問題を疑似体験していたことを知った参加者は、ABSをより身近な問題として捉えることができるようになるのです。

ABSの問題は、学生が直接関わるのが少ないため、学生という立場では取り組むことが難しく、そもそもあまり知られていません。関心を持つきっかけを提供するツールとしてゲームを使用し、楽しく、身近に触れることができるよう、工夫して取り組んでいます。

※ このゲームは、2014年度いそべや代表が“こども国連環境会議推進協会”という団体の活動の中で作成に関わったものです。

団体情報

- 創設：2002年
- 主な活動場所：東京都世田谷区
- 主な活動内容：広く環境問題に関する啓発活動、海岸清掃合宿、環境教育 ほか
- 連絡先：isobeya.room@gmail.com

- ホームページ：
<http://iso-room.jimdo.com/>

コラム：生物多様性に関わる活動の紹介

生物多様性に関する活動を意識的に実施している団体（「意識」）と、生物多様性に関する活動を実施しているものの、活動と生物多様性との関わりを意識していない団体（「無意識」）は、それぞれ、具体的にどのような活動をされているのでしょうか？

ここでは、アンケートに回答いただいた2団体を例にご紹介します。



学生NPO農楽塾

団体情報

- 創設：2003年
- 主な活動場所：東京都新宿区
(早稲田大学早稲田キャンパス構内)
- 主な活動：稲作など農作業
- 連絡先：nogakujuku@yahoo.co.jp
- ホームページ：<http://www.nogakujuku.net/>

農楽塾は、構内庭園にある自作の田んぼ(通称「わせでん」:上写真参照)での稲作を中心に、菜園での野菜やハーブの栽培、地域の幼稚園・小学校の子供たちが身近な自然を体験できるような企画など、農業や自然にまつわる様々な活動を行っています。「地方でたまに農業を体験するのではなく、日頃から農業に触れて生活ができる場を提供したい」という想いを持った学生が、2003年、大学に交渉し、わせでんを作り上げました。

収量を上げるための実験の一環で、周辺の生態系への影響が少ないように、バケツに植えた稲には化学肥料を使っています。一方で、わせでんの水は、コイやメダカ、カエルなど様々な生き物が棲む庭園内の池につながっており、周辺の生態系と密接に関わっています。その生き物たちに悪影響を及ぼすことが無いよう、ここでは化学肥料・農薬は使わずに稲を育てています。その成果なのか、わせでんの周りには、アマガエルやメダカなど、早稲田キャンパス周辺では普段見かけないような生き物がたくさんいます。現在、農楽塾ではわせでん周辺の生き物図鑑を作る計画が進行中です。

また、活動拠点である東京都高田馬場周辺の伝統野菜「内藤とうがらし」の栽培も、学内の地域活性ボランティア団体や地域のホテルと協力して行っています。このような伝統野菜を守る取り組みは、急速に失われている農作物の遺伝子の多様性を保全する上で重要です。普段菜園で収穫した他の野菜はメンバーだけで楽しむ程度ですが、内藤とうがらしは、ホテルで販売されるお菓子や、地域の飲食店で行われる「辛飯フェア」というイベントに使われ、大活躍しています。

農楽塾の活動は、生物多様性の保全を目的として掲げているわけではありませんが、田んぼの周りに棲む生き物に配慮した化学肥料・農薬を使わない農業の実践や、伝統野菜の栽培などは生物多様性保全に深くつながる取り組みです。一度、あなたの団体の取り組みについても生物多様性保全とのつながりを見つめなおしてみませんか。



木津川グループ河川レンジャー



団体情報

- 創設：2014年
- 主な活動場所：京都府京田辺市
- 主な活動：河川に関する普及啓発活動など
- 活動頻度：およそ月1～2回
- 連絡先：Facebookページ「木津川グループ河川レンジャー」からご連絡ください。

木津川グループ河川レンジャー（以下、木津川Gレンジャー）は、2014年度に発足した団体です。

河川レンジャー制度とは、国土交通省近畿地方整備局が設けた制度であり、淀川水系内の河川において住民と行政とが共に川づくりをしていくことを目標として作られました。河川レンジャーは河川の防災・歴史・自然に関する普及啓発活動や住民参加での美化活動などを行っており、その土地の歴史や自然を熟知した地元のシニア世代が担っている現状にあります。そんな中、木津川では、若さあふれる大学生に活動に関わって欲しいという河川レンジャーと、自然環境を通して地域連携活動に取り組みたいという学生の両者が意気投合し、大学生河川レンジャーが誕生しました。河川レンジャー制度としては初の試みになります。地元の河川レンジャーがアドバイザーとなり、大学生が活動の主体となり発足したのが木津川Gレンジャーです。

木津川Gレンジャーは互いに異なる専門分野を持つメンバーから構成され、木津川流域を舞台に、「遊び」を意識した生物採集や自然観察を行うだけでなく、「学び」を意識した環境教育イベントを実施しています。日頃、大学で外来魚を調査・研究しているメンバーは、外来魚が何を食べているかを体感してもらうために外来魚の解剖をイベントに取り込み、外来種が生態系に与える影響を伝えました。生態学の知識をもったメンバーは、昆虫採集とともに、一定面積内で採集できた生き物の個体数から河川敷全体の個体数を推定する方法を実践してみせました。

河川環境はその流域に住む人の命を守るために改修が行われ、維持管理に人の手が欠かせません。陸域の植物や昆虫、水域の魚などの生き物は、そのような環境下で複雑に関わり合って暮らしています。木津川Gレンジャーは地域の子どもたちに対し、自分の育つ地域の歴史や生き物を通じて、広い視野で自分の地域を見ることの大切さを伝えています。活動1年目を終え、参加した子どもたちからは木津川Gレンジャーを「憧れの対象」だという感想も得られ、今後の活動の広がりが期待されます。



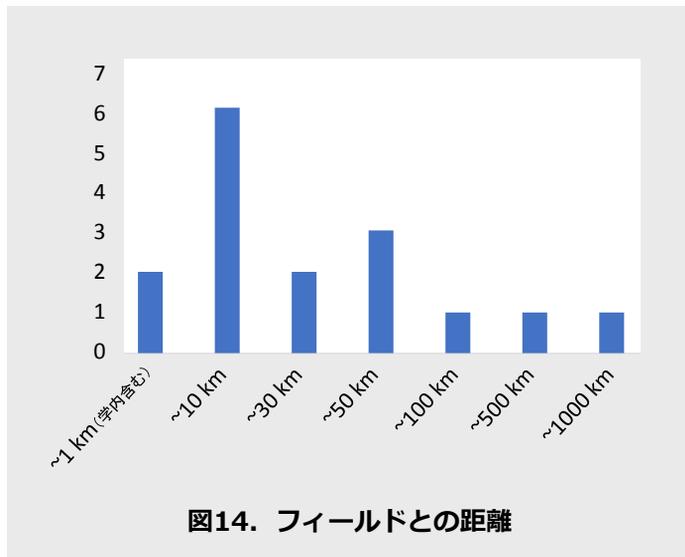
「意識」・「無意識」の団体の特徴



ここからは、全回答39のうち、生物多様性に関する活動を実施している26団体（「意識」、「無意識」）に、その活動の特徴や課題を聞いた結果を示しました。

フィールドとの距離

16団体（約6割）では、活動のフィールドを持っていました。その16の回答のうち約半数は、学校などの拠点とする場所とフィールドとの距離が10km以内に存在するというものでした。一方で、1000kmも離れたフィールドに通う団体も存在していました。



外部からの支援

生物多様性に関する活動を実施している団体のうち半数近くは「団体外部からの支援」を受けているという回答でした。その支援内容としては、「資金的支援」、「知識の提供」、「活動場所の提供」が回答数8と多く、一団体あたりでは平均して2種類以上の支援を受けていました。

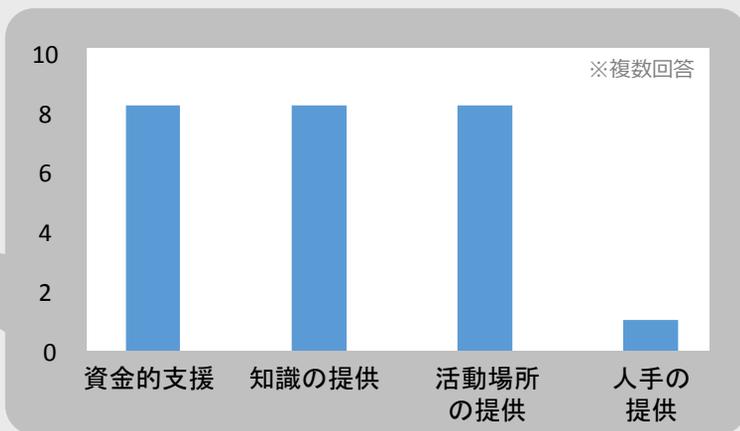
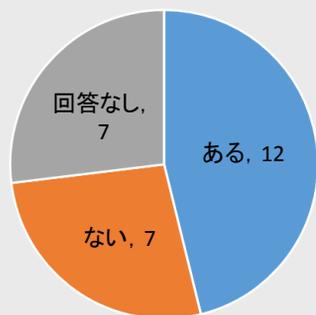


図15. 活動の際の団体外部からの支援の有無と支援内容

活動と生物多様性との関わりについて、「意識」している団体と「無意識」の団体の間で、外部からの支援の有無について比較をしてみると、「意識」の団体では、外部からの支援を受けているところが約7割と多かったのに対し、「無意識」の団体では、外部からの支援を受けているところは半数以下でした。

		意識	無意識	計
外部からの支援	ある	10	2	12
	ない	4	3	7
	回答なし		7	7
	計	14	12	26

表1. 団体外部からの支援の有無の比較

活動の課題

生物多様性に関する活動を実施している団体に、自由記述欄を設け、活動の課題について聞いたところ、13団体から回答が得られました。

自由記述欄に記入された各課題から、共通するキーワードを抽出しました。下図は、関連性の高いキーワードを近くに配置し、そのキーワードが抽出された数を()内の数字で示したものです。

記入があったうち、最も多く挙げられたキーワードは「知識不足」となり、次いで「団体運営の仕方」「参加者の固定・人員不足」と、人材に関する点が挙げられました。その他、フィールドを持って活動を行う団体特有の悩みとして、「フィールドが遠い」が挙げられました。

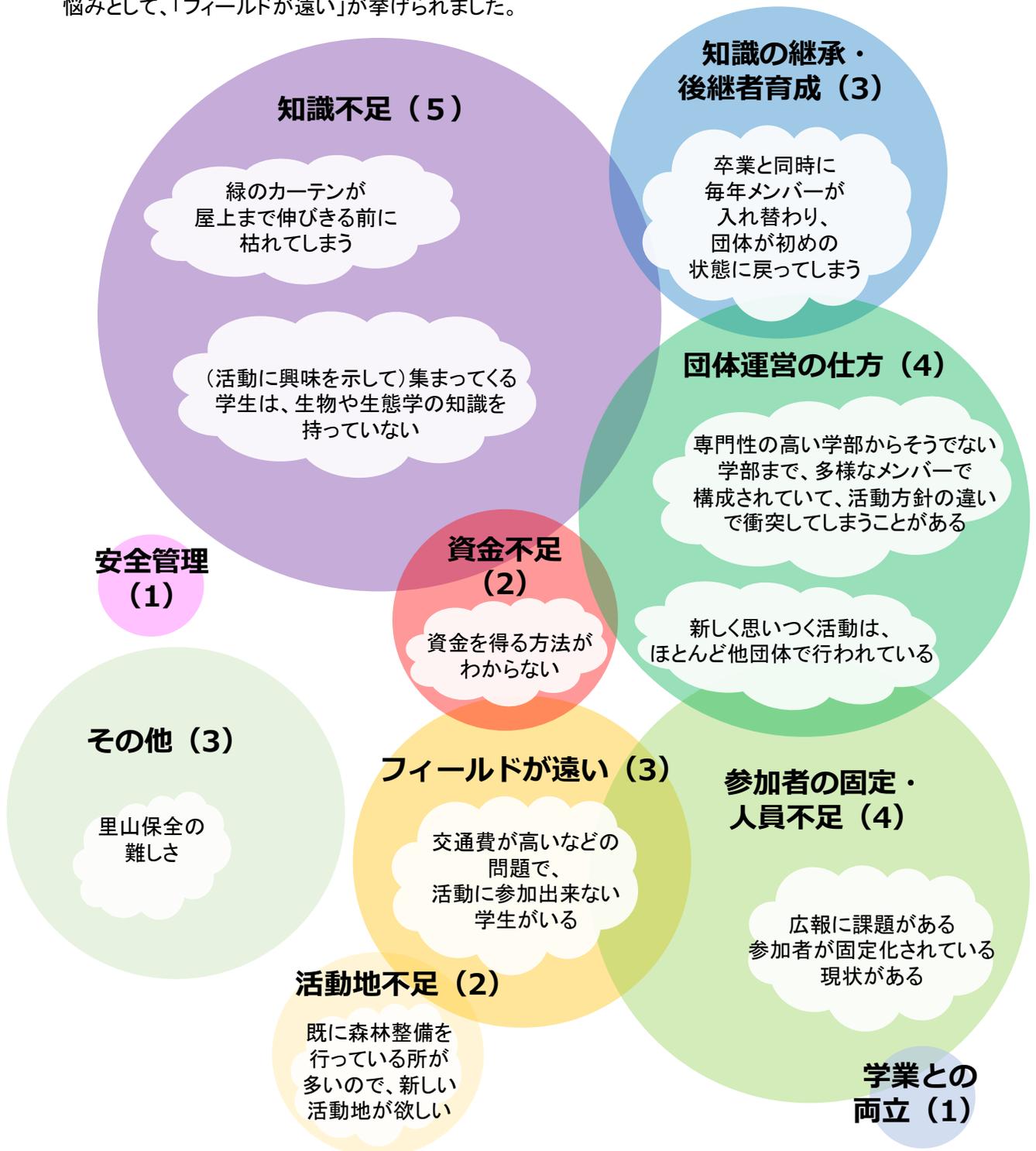


図16. 生物多様性に関する活動の課題

「無意識」・「該当なし」の団体の特徴



ここでは、全回答39のうち、生物多様性に関する活動を実施しているものの、活動と生物多様性の関わりについて意識していない団体（「無意識」）と、選択肢で挙げた生物多様性に関する活動にどれも該当しなかった団体（「該当なし」）に聞いた質問の回答を示しました。

生物多様性に関する活動の検討の有無

生物多様性に関する活動を実施しているものの、活動と生物多様性の関わりについて意識していない団体（「無意識」）と選択肢で挙げた生物多様性に関する活動にどれも該当しなかった団体（「該当なし」）に、「いままでに生物多様性に関する活動を検討したことがあるか」どうかを聞くと、「検討したことがない」という回答が最も多い回答でした。

「無意識」と「該当なし」の団体とで、この質問に対する回答結果の内訳を見てみると、「該当なし」の団体では、「検討したことがない」、「検討したが、優先度が低い」に回答が集中していました。

検討したが課題があって実施できていない, 0

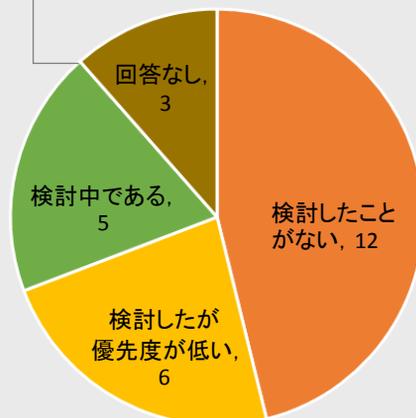


図17. 生物多様性に関する活動の検討の有無

	該当なし	無意識	計
検討したことがない	7	5	12
検討したが、優先度が低い	4	2	6
検討中である		5	5
回答なし	2	1	3
計	13	13	26

表2. 「該当なし」「無意識」の団体間での生物多様性に関する活動の検討の有無の比較

実施するにあたっての課題

質問に対して「検討中」と答えた5団体に対して、自由記述で「生物多様性に関する活動を実施するにあたっての課題」を聞いたところ、「知識不足で実施に至っていない。」「興味のあるメンバーがいたが、団体としての活動の優先度があったため、結局そのメンバーは他団体での活動を選び、団体としては実施しなかった。」「生物多様性という分野で、学生が何を出来るのかわからず、実現に至っていない。」といった回答がありました。

生物多様性に関する活動を実施する学生団体は多く存在した

アンケートの結果より、生物多様性に関する活動を実施している団体は、環境問題に取り組む団体のなかに数多く存在しました。その内訳としては、生物多様性との関わりを意識している団体（「意識」）と意識していない団体（「無意識」）が同数存在していました（10ページ）。

活動内容としては、普及啓発や里山保全管理など様々な活動が実施されており、「意識」「無意識」の団体ごとに実施している活動の種類の違いも見られました（10ページ）。

生物多様性との関わりが認識されていない活動が多く存在

回答者個人の回答結果ではあるものの、「生物多様性」の認知度は高い結果でした（9ページ）。一方で、生物多様性に関する活動を実施していても、生物多様性との関わりを認識していない団体が多く存在していました。

この理由としては、団体の活動が、生物多様性と関わりがあること自体知ってはいても、団体の主な目的が別にあるため、活動の中で特別生物多様性との関わりを意識しながら活動を行っていないことが考えられます。加えて、既存の活動のなかには、「遺伝的多様性」に関する活動など、生物多様性に関する活動だと認識されづらいものが存在することが考えられました。

生物多様性に関する活動を意識して実施している団体の特徴

生物多様性に関する活動を意識的に実施している団体では、フィールドを持っている団体が約6割を占め、団体外部からの支援を受けているところが多く存在しました（14ページ）。

また、実施している活動についての課題として最も多かった回答が「知識不足」であり（15ページ）、生物多様性に関する活動をするにあたって専門性の不足を感じる団体が多いことがわかりました。

まとめ

以上のことを踏まえて、生物多様性わかものネットワークでは、生物多様性に関する活動を促進させるために、下記のような取り組みが必要だと考えます。

- 環境問題に関する活動を実施しているものの、
生物多様性に関する活動は実施していない団体に向けて
 - ・ 「生物多様性保全と持続可能な利用」の重要性の発信
 - ・ 活動をはじめやすい活動モデルの創出
- 生物多様性に関する活動を実施しているものの、
活動と生物多様性の関わりを意識していない団体に向けて
 - ・ 既存の活動と生物多様性との関わりの読み解き
- すでに生物多様性に関する活動を意識的に実施している団体に向けて
 - ・ 情報共有や意見交換ができる場の創出などのフォローアップ

今後に向けて

今回のアンケートでは、39の回答を得ることができました。アンケートの自由記述欄には「このアンケートに回答することが、自身の活動と生物多様性との関わりを見つめなおす機会になった」という回答もあり、このアンケート自体が、生物多様性に関する活動の普及に効果があることが期待されました。

一方で、質問によっては回答数が少なく傾向を読み解くには十分ではない点も存在しました。

学生団体はメンバーの入れ替わりも激しく、調査年ごとの活動内容の変化が大きいのも特徴です。今後、定期的にこのアンケートを実施することで、学生団体の活動の経年変化も調査していきたいと考えています。そのためにも、より多くの学生団体に回答してもらえるようにアンケートの内容や配布方法を検討するなど、今回のアンケートの改善点を考察していきたいと思います。



第2章

特徴的な活動事例

インタビューの概要

第1章では、実施したアンケートの結果から、学生団体における生物多様性に関する活動の実態を把握することで、生物多様性に関する活動を促進させるためにどのような取り組みが必要かを探りました。その結果から、私たちは、すでに実施している活動と生物多様性との関わりを伝えること、そして「生物多様性保全と持続可能な利用」の重要性の発信が必要だと考えました。

この第2章では、生物多様性について特徴的な活動を実施している3団体について、活動の詳細についてインタビューを行いました。このインタビューでは、様々な活動と生物多様性がどのように関わっているのか、具体的にイメージできるように伝えることをねらいとしています。

インタビューでは、生物多様性わかものネットワークのメンバーがそれぞれの団体の代表者と直接会い、活動をはじめたきっかけや、活動内容、活動の魅力について聞き取るという方法で行いました。

あざおね社中

神奈川県北西端にある小さな集落「青根」。のどかな風景の広がる青根は、高齢化が進んだ準限界集落でもあります。そんな青根に、小さなきっかけから通うようになった「あざおね社中」は、飄々としているようで内なる熱意が宿る村山史世先生とそこに集う愉快的な学生たちです。小気味よい先生と学生のやり取りの中に、あざおね社中の「地域活性」に対するしなやかで熱い想いがありました。 (文責：後藤 なな)



「生きた学び」の場・青根

麻布(あざぶ)＋青根(あおね)で「あざおね」、そして“志を同じくする仲間”という意味の「社中」、その二つを足し合わせた「あざおね社中」は、麻布大学の学生と先生、社会人から構成されている団体です。

活動は、青根の集落の人との偶然の出会いをきっかけに、先生と学生で休耕田を耕すことから始まりました。「“知る”だけではできないことは世の中に沢山ある。例えば、火の起きる原理は知っていても釜でご飯を炊けない、とか。そういう生きるために必要なことを学生たちに学び取ってほしい」と思い、活動をはじめた。」と村山先生は言います。青根は、おじいちゃんから教えてもらう田植えの仕方や、普段はできない里山の生き物たちとの触れ合いなど、まさに生きた学びの宝庫です。

あざおね社中のメンバーは、この青根での経験を学びに変えながら、活動を田んぼでの自然観察会や青根を流れる道志川での環境教育へと発展させていきました。しかし、青根の自然とそこに住む人たちに関わっていくうちに、青根の森を守りこの景色を作ってきた集落自身が、過疎化という大きな壁に直面していることに気がつきます。そこで、あざおね社中は、過疎化に対して、青根の生物多様性を最大限に活かした活動をはじめました。

団体情報

- 創立 2011年
- 主な活動場所 神奈川県相模原市緑区青根
- 活動頻度 月2回程度
- 活動内容 水田と里山の生物多様性調査、未来遺産調査、環境まちづくり、自然観察会、環境学習、農業ほか
- 活動参加条件 あざおね社中の活動に興味・関心をもっていること。多様な参加者を求む!
- 団体連絡先 Mail: mail@azaone.com Tel: 042-769-1965 (麻布大学 地域社会研究室)
- ホームページ <https://sites.google.com/a/azaone.com/azaonecamp/>
(最新の活動の様子はFacebook「あざおね社中」をご覧ください。)

川で結ばれる地方と都市

－生物多様性が育む私たちの飲み水－

青根の集落の横には「道志川」がとうとうと流れています。この川は下流で相模川に合流し、横浜市につながる川です。集落の中には「水源林」に指定されている森が存在しています。森は降った雨をゆっくりと地下に通して綺麗にし、大都市が広がる下流部へ水を提供しています。生き物の豊かな森があるからこそ綺麗な水ができる、訪れるだけでそんなことが実感できるような豊かな自然に囲まれています。

そんな青根の魅力に惹かれて「ここをフィールドにして活動がしたい」と、あざおね社中は2011年より通い始めました。

見えてきた課題 －過疎化に向き合う－

青根に通うなかで、あざおね社中は過疎化という壁にぶつかりました。青根は、もともと林産、特に木炭の生産が盛んな地域で、森の手入れは人々の生活のために行われていました。しかし、過疎化が進み、担い手はどんどん減少しています。森の水源林としての機能は、人が管理することで保たれます。このままでは水源林を守ってきた集落が消滅してしまうかもしれません。

過疎化問題の解決のためには、青根の魅力を伝えることで、多くの人に青根に来てもらうことが大切です。ふもとの市街地から車で約1時間、山を抜けてやっと出会える地方の魅力を伝えるにはどうしたらいいのか。あざおね社中が出した答えは、新しい観光施設を作ってどこにでもあるような地方を目指すのではなく、ここでしか育むことのできない魅力——草原には可愛いカヤネズミが棲み、田んぼにカエルたちの合唱が響く、青根の「生物多様性」を発信することだったのです。



地域課題を解決するために －交流から価値は生まれる－

今、あざおね社中は、いかにして青根に外からの交流人口を増やすかを考えています。市街地からの参加者も積極的に招いた環境教育イベントは、青根の自然環境を活かしながら、日頃何気なく使う水と人の暮らしの関わり

や、川で結ばれた都市と地方のつながりを考えるきっかけを子どもたちに提供しています。

集落に数年程度通ってもまだまだヨソモノ。しかし、ヨソモノだからこそ発見できる魅力があり、外からの交流を生み出すことができます。そこに、若者らしい発想力や勢いも加わえながら、あざおね社中はこれからも活動していきます。

生物多様性を地域の魅力と捉え、発掘し、地域活性化への力と変えていく、こうしたあざおね社中のまちづくりはきっと今後さらに盛り上がっていく、そんな期待が膨らむインタビューでした。





命をつなぐPROJECT学生実行委員会は、生態系ネットワークの形成や広報の活動を通じ、それぞれの夢や目標に向かって学びを深めている団体です。学生・行政・企業が協働するこのプロジェクトは、次世代の生物多様性保全の担い手育成へとつなげています。
(文責：徳武 雅也)

COP10開催地・愛知の若者と「生物多様性」

命をつなぐPROJECTの旗揚げは、2010年に愛知・名古屋で開催された生物多様性第10回締約国会議(COP10)までさかのぼります。COP10では世界中の代表や先住民、NGOなどが集い、昼夜にわたり生物多様性に関する議論が白熱しました。そして、COP10終了後、愛知県は開催地であった自治体として、企業、他の自治体などの多様な主体との連携の先進事例を作るために、生物多様性保全に関するモデル事業の設立に着手しました。その一つとして、自治体・企業などをつなぐ取り組みとして「命をつなぐPROJECT」がスタートしました。命をつなぐPROJECTでは、新しい活動の方向性を生み出す若い発想力を求められて、学生も活動のメンバーとなっています。それが学生実行委員会です。参加する学生にとって、自治体や企業、専門家の方々と直に議論し、現場での実践的な作業をする、という貴重な経験の場になっています。

活動では、「より多くの人を巻き込む生物多様性保全」をテーマとして、愛知県の知多半島にある企業緑地の生態系ネットワーク形成と、生物多様性保全の重要性を伝えるためのフリーペーパー「eco Reco」の発行を行っています。



生き物と工場の共存を図る

知多半島の臨海部は日本屈指の工業地帯です。ある一定以上の大きさの工場は、法律でその工場の敷地内に緑地を設置することが定められています。そのため、工業地帯では、工場が密集する一方で、企業緑地も多く存在します。しかし、企業ごとの緑地はフェンスに隔たれており、そこに棲む生き物の移動の妨げとなっていました。そこで、命をつなぐPROJECTでは、企業ごとに仕切られているフェンスに動物の抜け道作りやビオトープをつくることで、分断されている生き物のネットワークをつなぐ取り組みをしています。



「生物多様性」を魅力的に発信する

命をつなぐPROJECTでは、年に4回2万部ずつ、愛知県内でフリーペーパー「eco Reco」を発行しています。eco Recoは学生実行委員会が発案したもので、記事を通して、命をつなぐPROJECTの活動や環境に関する情報をわかりやすく解説しています。今や、愛知県内30以上もの大学で設置・配布され、団体の活動情報などを通じて、多くの学生に「生物多様性保全」が身近なテーマであることを伝えています。



COP10開催地・愛知から若者との協働モデルをつくる

学生実行委員会は、COP10の話し合いの成果を将来に活かすべく、COP10開催地の学生団体としての責任感をもって活動しています。

活動の現場では、大学の講義だけでは感じるのが難しい保全活動のノウハウや「生き物のつながり」を実感することができます。そして、その体験から同世代の言葉でフリーペーパーを作成し、多主体との連携によって効果的に発信することで、県内のわかものへの生物多様性の認知度向上への大きな力となっています。



団体情報

- 創立 2011年
 - 活動内容 企業緑地の整備事業（月1～2回程度）、会議（週2回）
 - 活動参加条件 特になし
 - 団体連絡先 Mail: chita_econet@yahoo.co.jp
Facebook「命をつなぐプロジェクト学生実行委員会」
Twitter「命をつなぐPROJECT」で情報発信をしています！
- 主な活動場所 愛知県知多半島



東京海洋大学うみがめ研究会は、ウミガメのモニタリング調査を中心に活動している団体です。「『ウミガメの生態の解明』こそが最大の環境保全」と考える想いをインタビューしてきました。
(文責：篠原 光礎)

地道な研究活動 — ストランディング調査 —

東京海洋大学(当時は東京水産大学)は、大学の特徴から、海や海の生き物に関心をもつ人が多く、大学の部活の一つである水産生物研究には様々なプロジェクトがありました。そのなかからウミガメ部門が1997年に独立し、現在の「東京海洋大学うみがめ研究会(以下、うみがめ研究会)」が結成されました。

うみがめ研究会では、ウミガメに関する様々な調査を行い、調査成果を学会や環境教育の場で積極的に発信しています。その中でも現在、団体のメインの活動となっているのが「ストランディング調査」です。

ストランディング調査とは、海岸に座礁したウミガメを見つけ、その個体の体の大きさや、どんなものを食べていたのかなどを調べるものです。関東沿岸域で、NPO法人エバーラスティング・ネイチャー(以下、ELNA)が行っていたウミガメ調査に協力する形で行っています。

「1頭のウミガメを調べることで100頭のウミガメが助かるかもしれない。」と話すのは、OBの中澤さん。ウミガメは世界中の海を泳いで一生を全うする生き物のため、調査・観察の難しい生き物です。まだまだ生態についてわからない点が多い生き物だからこそ、調査結果を積み重ねることでウミガメ保全につなげています。

団体情報

- | | | | |
|----------|--|----------|-------|
| ■ 創立 | 1997年 | ■ 主な活動場所 | 東京都港区 |
| ■ 活動内容 | ウミガメに関する調査研究活動など(不定期) | | |
| ■ 活動参加条件 | 部員のみ | | |
| ■ 団体連絡先 | Mail: kaiyodai.kameken1997@gmail.com | | |
| ■ ホームページ | http://kameken.web.fc2.com/ | | |

モニタリング調査を続けていく秘訣



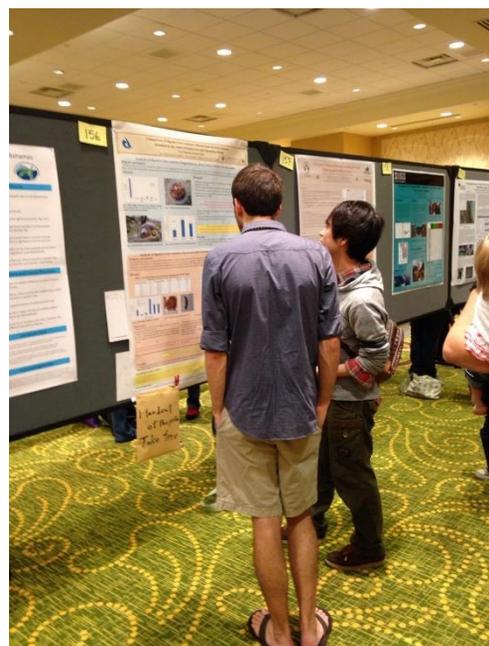
ストランディング調査は、2003年から毎年継続的に実施しています。この調査は、結果を積み重ねるほどにウミガメの生態を解明していく重要な活動である一方で、同じ作業を繰り返す地道なものでもあります。

メンバーの世代を超えて調査を続けていく秘訣は、「人との交流」、「ウミガメが見られること」です。ウミガメに関するイベントや国際会議などでは、調査や保全活動の大先輩たちから直接熱い想いを聞くことができます。また、ウミガメの実物を見ることができることも調査の魅力となっています。

調査結果の発信 — 国内そして国外へ —

ストランディング調査を含めた調査結果は、多くの人に発信していくことによって本当の保全活動につながります。うみがめ研究会は国内外に向けた発信の場を設けました。

うみがめ研究会は、長年ウミガメを調査してきた活動家や研究者にひけをとらず、研究の舞台で第一線で活躍している存在でもあります。毎年開かれる“日本ウミガメ会議”や、学生部門の集まりとしての“学生ウミガメ会議”に参加し、最新のウミガメ調査から得られた知見を積極的に発信しています。2010年からは“国際ウミガメ会議”にも参加し、今までの調査結果の発表や、世界のウミガメの研究事例についての情報収集を行っています。ウミガメは世界中の海を回遊する生き物のため、日本だけでなく世界の研究を知ることも非常に重要となるのです。



生態の解明こそが最大の保全活動



インタビューで最も印象深かったのは「生態の解明こそが最大の保全活動である」という団体の方針でした。前に述べたとおり、ウミガメは未知の部分が少ない生き物です。生態がわからない中で保全活動だけ考えても意味がなく、保全活動のつもりで取り組んだことがウミガメにとって悪影響を及ぼすこともあり得ます。自ら調査し、借り物の知識ではなく自分たちで得た知見をもとに発信をしていく、ウミガメに対する真摯な姿勢を深く感じるインタビューとなりました。

インタビューより

今回のインタビューでは、具体的な活動内容や生物多様性との関わり合い、わかものに取り組むことで出せる活動の魅力を捉えることができました。

インタビューを行った団体の活動内容は、地域づくりや緑地保全、研究と三者三様であり、活動の方向性やフィールドも全く異なります。これは、生物多様性が里山や企業緑地、砂浜など、あらゆる環境に存在し、生物多様性と活動との接点も、「地域活性の鍵となる魅力として」、「保全対象として」、「研究対象として」というように多様であることを反映しているためだと考えられます。

一方で、活動内容は異なっているものの、それぞれの活動では、住民や行政、企業、NPOなどの様々なセクターと連携しながら活動を展開しているという共通点がありました。連携をすることによって、地域に根差した活動、県レベルでの普及啓発、世代を超えた研究を実現しています。

生物多様性に関する活動のあり方は実に多様です。今回インタビューできた活動はまだまだ少ないですが、今後もっと様々な学生団体にインタビューを行い、そこで取り組まれている生物多様性に関する活動の魅力をより具体的に伝えていきたいと思えます。



生物多様性を守るために、あなたにできること

「生物多様性に興味はあるけれど、何をしたら良いのだろう？」

行動に移すための事例を、いくつか紹介します。

一人でできること

・掲載されている団体の活動に参加する

掲載されている団体の中には、一緒に活動を行うメンバーや、イベントの参加者を募集している団体もあります。気になった団体に、ぜひご連絡をしてみてください。

・「MY行動宣言」に参加する

MY行動宣言とは、「国連生物多様性の10年日本委員会」が行っているキャンペーンです。日常でできる5つのアクションは、生物多様性を守るための第一歩となります。自分にできることを宣言し、日々の暮らしのなかで、この5つのアクションを心がけてみては？

- ✓ Act 1 地元でとれたものを食べ、旬のものを味わいます。
- ✓ Act 2 生の自然を体験し、動物園・植物園などを訪ね、自然や生きものにふれます。
- ✓ Act 3 自然の素晴らしさや季節の移ろいを感じて、写真や絵、文章などで伝えます。
- ✓ Act 4 生きものや自然、人や文化との「つながり」を守るため、地域や全国の活動に参加します。
- ✓ Act 5 エコマークなどが付いた環境に優しい商品を選んで買います。



○もっと詳しく知りたい方はこちら！：<http://undb.jp/action/spread-action/>

団体としてできること

・掲載されている団体にお話を聞く

他の団体の活動を知ることで、ご自分の活動に活かせるヒントが見つかるかもしれません。気になる活動を見つけたら、まずは団体に連絡をとってみましょう。お話を聞いて、ご自分の活動の一層の充実と、新たなつながりの創出に役立ててみては？

・にじゅうまるプロジェクトへ参加する

「愛知ターゲットを知り、活動宣言をし、行動する」ということを核とした、どなたでも参加できる活動です。現在、多様な立場の団体が、20の目標ごとに活動を宣言、行動しています。他団体とのつながりが増える、愛知ターゲットへの貢献が証明できるなど、活動を登録することで様々な特典があります。



○もっと詳しく知りたい方はこちら！：<http://bd20.jp/>

編集後記

生物多様性に関する書籍などは、今までに数多く出版されていますが、今回、わかものに焦点を当て、「生物多様性」がどのように捉えられているかを調べ、解説したものを初めて作ることができました。アンケートの内容など今後活かすべき改良点もありますが、わかものによる生物多様性に関する活動の実態を把握するための足掛かりとして、本書がまとめられたことは大きな価値があると考えています。

本書は、作成メンバーが疑問に感じたことをお互いにとことん突き詰めながら作り上げました。作成にあたっては、対面でのミーティング以外にも、SNSやクラウドサービスを駆使して、メンバーが好きな時間に遠隔からも編集作業を進めてきました。実際に、オーストラリアから作成に携わっていたメンバーもいました。本書の作り方も現代的で「わかもの」らしい、と言えるのかもしれませんが。

今回、「生物多様性」と、学生団体の「活動」や一人ひとりの「行動」との間にある隔たりを埋めることにこだわって作成しました。本書を一人でも多くの「わかもの」に手に取っていただき、行動を起こすきっかけとなることを心より祈っています。

(生物多様性わかものネットワーク 生物多様性わかもの白書 編集長 後藤 なな)

作成メンバーより

「生物多様性」を身近なものに感じて、周りの人々にもそれを伝えることができるような活動が、本書をきっかけとしてもっとたくさん生まれると嬉しいです。

(安藤 みゆき)

本書をきっかけとして、実は自分の活動も「生物多様性」というキーワードで整理が出来るのかも、と感じてくれた人がいればいいなと思います。

(佐藤 真耶)

生物多様性の問題の解決は、いかに「自分事」としてこの問題をとらえることができるかだと思います。楽しく読んでいただいた上で、少しでも「自分事」として生物多様性を感じてもらえたら幸いです。

(篠原 光礎)

微力ではございますが、本書の編集に携わることができたことに感謝致します。本紙が若者と生物多様性の関係の周知にとどまらず、若者が他のセクターとの協働へつながるきっかけになると幸いです。

(徳武 雅也)

編集を通じ、自分が思いもしなかった生物多様性に関わる様々な活動を垣間見ることができ、勉強になりました。本書を通じて、読者の皆様が生物多様性に興味をお持ちいただければ幸いです。

(中村 拓)

学生最後の年に本書に携わることができ、とても感謝しております。本書がきっかけとなり少しでも全国の学生が生物多様性に興味を持って活動に取り組んでもらえたらと思います。

(引地 慶多)

若者の活動の実態について、本書を通して少しでも理解いただくきっかけになれば幸いです。

(松井 宏宇)

微力ながら本書の作成に携わることができ、大変嬉しく思っております。全国の学生にとって、本書が生物多様性への関心を抱ききっかけとなれば幸いです。作成にあたり、協力してくださったすべての方に深くお礼申し上げます。

(森木 千沙都)

謝辞

多くの学生団体の皆さまに「生物多様性に関する活動についてのアンケート」にご回答いただかなければ、本書は成り立ちませんでした。ここに厚く御礼申し上げます。

また、個別にインタビューをさせていただいた学生団体の皆さまには、詳細な活動内容や活動に込められた想いをお伺いすることができ、本書をより魅力的なものにすることができました。心より感謝申し上げます。

生物多様性 わかもの白書 vol.1

2015年 6月5日

生物多様性わかものネットワーク



にじゅうまる
プロジェクト

